

# 離恨綿綿 春日如年

— 古代日中後宮女性文学の比較研究

孫 佩 霞

紫式部日記には、時には行雲流水のような風景描写が見られ、時には煩を厭わずに後宮の華やかさが並び、また時には激昂して女房や評判の女性作家や歌人を論断するのが見られるが、時には「心」と「身」についての愁訴が詰まってくる。それは文体と内容の両方から自然と前半の記録的な日記部分と後半の消息的部分に分かれて見られる。この錯綜した日記の様相について、創作事情または編集事情の両方から多くの論考が行われてきたが、前後の内容の切れ目がはつきりしないということによって「現在の形を前提にして作品としての一貫した構成や主題を認める方向で作品論は深められてきた<sup>1)</sup>。そして日記の創作は「主人道長の要請によって書いた<sup>2)</sup>と考えられ、前半の記録性から後半の女房論や自己観照への急な展開について幾通りもの見解が提示されている<sup>3)</sup>。

記録的文体からなぜ消息文へと急展開したかは、筆者の容喙する能力のない問題であるが、敢えて一言考えを述べれば、日記に書かれた宮廷の雅やかな世界とそこに生きる人間百態及び自分の心を覗き込むような書きぶりは、源氏物語や紫式部集にも一貫されたものであり、人生のあるべき姿は紫式部が生涯をかけて問い続けていた主題であったことを考えれば、日記の記録的部分と消息文とを一統

きのものとして拘る必要もないのではないかと思われるが、ただ内容からすれば創作時期を宮仕えの時期内と考えたほうが自然であろうかと思われる。

この小論ではこうして紫式部日記に見られる紫式部文学の一貫性に基づき、日記の文学性を検討し、中国の宮廷女性文学の代表作者に基つき、日記の文学性を検討し、中国の宮廷女性文学の代表作者花蕊夫人の「宮詞百首」との「横」への比較を加えて、紫式部日記の創作動機と内容的特徴を追究し、後宮女性作者として花蕊夫人との異同を指摘したい。それから中国の古代後宮で活躍した女性班昭と対照して、精神世界という「縦」の視点から、紫式部日記の所謂「憂き意識」の本質を考えたい。

—

これまでの多くの研究を見ると、紫式部の「宮仕え」生活については、「屈辱と自虐に満ちた後宮生活<sup>4)</sup>であった」という結論に尽きる。しかし、筆者が先ず疑問に思わざるを得ないのは、才学を「天下人」である権勢家道長に買われた紫式部の「宮仕え」は、彼女を悩み通させるほどの「恥ずかしい」ことだったであろうか？もし宮仕えがそんなに不名誉なことならば、どうして自分の考えをしっか

り持っている紫式部は出仕したのであろうか。あるいは、先覚の指摘にあったように、色々と辞められないしがらみがあったであろうと考えられるが、しかし日記に徴する限り、宮仕えをやめれば幸せになれるという紫式部でもなかったように思われる。

「身の憂さは心のうちにしたひ来ていま九重ぞ思ひ乱るる」

(57)

これは宮仕えの当初の気持ちを詠んだ独り言のような和歌であるが、この詠作から分かるように、そもそも紫式部は身の憂さを抱えていたのであり、「内裏は憂悶を掘り起こす新たな契機となり、改めて「憂さ」を断ち切れぬ自分を認識」させたのである。しかも、それからの宮仕えの日々は紫式部にとって果たして、所謂「日記的部分」がこれまでに議論されたように、陰惨なものだったであろうか？日記の内容を細かく検証してみると、必ずしもそうとは思えない。むしろ、紫式部は、御産を中心事件に、彰子中宮の傍に居る時には後宮世界の一員として他の女房と一緒に泣き笑い、時には傍観者の冷徹な眼差しをもって、美しい或いは醜い、または惨めな「百態の人間」を観察しては付き合ったり、拒んだり、考えたりしていたと看取できる。幾つかの例を見てみよう。

主人である道長の一挙一動について、娘に皇子が生まれたことを喜ぶ様子を、

「この宮の御しとにぬるは、うれしきわざかな。このぬれたる、あぶるこそ、思やうなるこちすれ」(二二)

「あるじのおほい殿、「あはれ、さきざきの行幸を、などで面目ありと思ひたまへけむ。かかりけることもはべりけるものを」と、酔ひ泣きましたまふ。」(二七)

「宮の御父にてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしませず。母もまた幸ありと思ひて、笑ひたまふめり。よいをとこは持たりかし、と思ひたんめり」(三二)

などと等身に書き記し、そして性格が闊達で大様な道長がその北の方も居づらくなるほど有頂天になった様子を活写することによって、道長自身が、娘腹の皇子誕生が自分の政治生命に何を意味するかを、「御みづからもおほししるこそ」と、最も良く知っていたからだ、紫式部は本質を反映する事象に鋭い筆を運びながら、さりげない書き方を見せている。下玉利百合子氏が、一条天皇の人物像を通して日記に見られる紫式部のこういう文学的特徴について論究したことがあるが、参照されたい。

紫式部の筆は、彰子中宮にも「御用記録」のような賛辞は奉げなかった。彼女の日記には彰子中宮は「国母」たる威厳のある中宮ではなく、あくまでも、幸いであろうと、なかるうと、「妃」としての運命にされるがままに忍耐し、自己表現の殆ど見えない「内気」で可愛らしい娘であった。

「すこしうちなやみ、おもやせて、おほとのごもれる御有様、つねよりもあえかに、若くうつくしげなり。」(二〇)

という書き方に、御産に憔悴したその姿を、紫式部は心から慈しんでいたことがわかる。

日記の全編をみても、紫式部は政治的見解を真正面から表出することを回避し、登場人物がどんな立場の人であろうと、故意の褒貶をせず、隨身や家司の愚かさ、加階された官僚らの満足げな表情、女房たちの泣き笑い、ないし駕輿丁の喘ぎ等々、何時の世にも見られる「平俗な衆生相」そのものを終始見詰めていた。いわば、平安

時代の最高権力者を取りまく現場の一齣に際会した紫式部は物語を虚構する文学者として、まさに物語のような現実的一幕を書かずにはいられなかったと考えられる。当然、その文学者の目は、後宮ならではの儀式作法、器具の美的特徴、ないし女房の服装の色や模様等々の隅々にまで細かく及ぶわけである。ここに紫式部が事実、宮仕えの生活を彼女なりに「積極的に」生きていた姿勢が見出される。下玉利氏の言い方を拝借すれば、日記の創作は紫式部にとって「それらは悉く、作者の炯眼によって選択され、ぬきさしならず作中に定置せしめられた文学的営為の所産であ」り、作家としての創造活動の継続に他ならない。

むろん、紫式部は自らが日記に取上げる後宮世界の一女房として、この現実自身の色々な事情によって複雑に絡んでもいるから、時と場合によって心の動きも異なるが、宮仕えは後宮文化と人間存在を追究する彼女の文学精神にとって格好な現場であつたと見られる。

日記冒頭の「一 土御門邸の秋」の閑静な佇まいを、「秋のけはひ入りたつまに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし……うき世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまるるべかりけれど……」と記した内容から、紫式部自身も不思議に思うほどに、彼女は宮仕えの環境にすっかり心地よく落ち着いていることがわかり、また、「三 朝露のおみなへし——ある朝」、「四 殿の子息三位の君——ある夕べ」、「八 重陽の菊のきせ綿——九月九日」等々に記されたように、当代一の権門との優雅な交わりが日常的にあつたことも愉快なことであつた。そのうえ「七 宰相の君の昼寝姿——八月二十六日」、「二六 土御門邸行幸——十月十六日」などに描かれたように、「絵にかきたるものの姫君」か「むかし天降りけむをと

めごの姿」に美的感動を覚えたのも、宮中行事が行われるたびに体験できたようで、さらに「五 御盤のさま——七月下旬」、「六 宿直の人々——八月二十日過ぎ」、「九 薰物のころみ——同日の夜」二九 月夜の舟遊び——九月十六日の夜」等々、筆舌を惜まずに記された宮中ならではの雅びな遊びや登場人物たちの情態などは、後宮の華やかな世界に身をおいたからこそ参加したり見聞したり出来たことで、紫式部をして常に目を見張る人間発見を体験させ、美的センスに磨きをかけ、そして素敵な出会いをも成させたことが窺える。この事実は紫式部自身も明白に意識したようで、

「池の浮き草とうたひて、笛など吹きあはせたる、暁がたの風のけはひさへぞ、心ことなる。はかないことも、所がら折柄なりけり」(五四)

と、作者の心に「余裕」とでも言えるようなものが感じられる。

いったい、ふつうの人間でさえ普段とまったく違った環境に身をおいた時、また珍しい体験をした時に、旅行記や日記、或いは友人への手紙などにそれを記し伝えたり、自分の人生経験として文章にして思い出に留めたりすることが多いことから、源氏物語を書いた紫式部が「九重」での日々の体験を、誰かに命じられるまでもなく、日記に書き記したことは極自然の成り行きであろう。南波浩氏がその大著『紫式部集全評釈』のなかで、紫式部の日記とその歌集と源氏物語の三作品の間に見られる表現の相似性を検証されていたが、それによつても紫式部日記の文学性が自ずと見えてくる。

その自主的創作性は文学伝統の影響にも裏打ちされる。この点についてはすでに多くの先覚によって論じられていた。つまりそれまでの文学の存在、例えば土佐日記、蜻蛉日記、特にライバルという

意識さえ抱かせた枕草子などが、作者の日記創作の意欲を掻き立てた要因の一つにもなつたと推定される。さらには、日記的な部分は事実を書いているのにも拘らず、自分に語りかけているような書きぶりが否めなくて、文体上の特徴が重視されるべきであることも、先覚がすでに言及したことである<sup>11)</sup>。

次節では、後宮生活をテーマにした中国後蜀国の花蕊夫人の「宮詞」を比較対象として、紫式部日記の文学的性質を更に追究してみたい。

## 二

花蕊夫人とは唐から宋への過度期の十世紀中葉938年ごろ、後蜀の後主孟昶の後宮に入つて間もなく後宮の寵愛を一身に集めた妃である。その美貌を花に「擬へるに足らず。花の蕊の翺りて軽きに」似せたほどの美人というだけでなく、優れた文才の持ち主であった<sup>12)</sup>。彼女は「宮詞」の祖といわれる中唐の王建の「宮詞」百首にそられて、自らの後宮生活をも「宮詞」百首に詠みこんだと見られている。それはいわば後蜀国の地方豪族の姫だつたらしい花蕊夫人が、今までとはまったく別世界の後蜀国主の後宮に入つたことが、中流貴族の娘である紫式部が後宮に入ったのに似ており、王建の先行した文学創作に刺激を受け後宮生活を百首の詩に詠んだのも、紫式部が枕草子の存在を強く意識したであらうことも相似し、そして二人の女性が皆非凡な文学才能を持っていたのである。

のみならず、「宮中」という特殊な空間に展開される人々の生活を捉える文学的視点においても、帝寵を一身に蒙つた妃である花蕊夫人の「宮詞」百首と、一介の女房に過ぎない紫式部の日記との間

に、意外にも、高い相似性が見られる。その相似性は日中文学の伝統に由来するジャンルの違いさえ乗り越えたもので、下記によって具体的に検証してみる。

1、宮中の同性の動向への注目がその一つである。ただ、紫式部が主に自分と同じ立場の女房を具体的な対象にしたのに対し、花蕊夫人は主に他の妃を目で追っていたのである。詩の順番は増田清秀氏の「唐五代人作宮詞資料編」による<sup>13)</sup>。

「修儀承寵住龍池、掃地焚香日午時、等候大家來院裏、教教鸚鵡念宮詞。」(15)

「才人出入每相隨、筆硯將來繞曲池。能向彩箋書大字、忽防御製寫新詩。」(16)

「婕妤成長帝王家、常近龍顏逐翠華。楊柳岸長春日暮、傍池行困倚桃花。」(30)

「年初十五最風流、新賜雲鬟使上頭、按罷霓裳歸院裏、面樓雲閣總新修。」(34)

「昭儀侍宴足精神、玉燭抽看記飲巡、倚賴識書為錄事、灯前時復錯瞞人。」(87)

上掲の詩に描かれたのは、香を焚いて帝の來訪を待つ間に一生懸命飼っているインコに新しい宮詞を教えたりする修儀(第15首)、帝の傍に何時も筆、硯、色紙などを携帯しながら御供する能筆ではあるが、また心の中では、何時新詩を詠まれるか分からない帝に備えなければならなかった才人(第16首)、帝王の家に生まれ、帝と後宮の贅沢にとづくに慣れ、春の日暮れに池のほとりを散策して眠くなり、花の咲いた桃の木に寄りかかっている婕妤(第30首)、十五歳にして帝の氣に召され、新たに賜った飾りを頭にかざし霓裳

羽衣曲を演奏して自分の庭に帰って見たら楼閣がまた一新された少女（第34首）、宮中の宴の席上に目を輝かせて、罰酒を数えては記録係りに記させるが、何回も間違えた昭儀（第87首）、といった後宮の女性たちである。彼女らの日常的な一挙一動を、花蕊夫人は実に細かく観察して詩の言葉によって記している。その詩の行間に、詠まれた人物の生い立ちや性格、行動ないし事件の内容までが真実性を持つて鮮明に浮き彫りされる。

このような眼差しと描き方は、中宮を含め周りの女性を観察する時の紫式部に酷似していると言えよう。天下人の姫様として大事にかしずかれ、一条天皇にも愛されているが、人の目を避けて漢文教養を身につけようとする彰子中宮、普段の日も行事の時も、突然和歌の応酬を求められる女房たち、仕事で疲れてうたた寝する美しい友人が驚かされた一齣——花蕊夫人の詩句で言うところ「昼寝宮娥夢裡驚」、また何がしの女房が大事な席上、恥をかいたといった内容から、海を越えて日中の両後宮が重なって見えてくる。

また紫式部日記に

「目うつりつつ、劣りまさり、けざやかに見えわかず」（三九）

と書かれた華やかな五節の舞姫や付き添い童女の姿が

「小小宮娥到内園、未梳雲鬢臉如蓮」（45）

「宮娥小小艶紅粧、唱得歌声透画梁」（73）

という花蕊夫人の詩句を想起させる。

2、後宮の日常生活における相似。

紫式部日記に

「播磨の守、碁の負けわざしける日、あからさまにまかでて」（五）

などの内容から、後宮ではご馳走をかけるなど、ちよつとした賭け事を遊んだりするのを女房たちが観戦する光景が見えてくるが、花蕊夫人の

「日高房裏学囲碁、等候官家（皇帝のこと）未出時。為賭金錢  
争路数、専憂女伴怪来遲」（55）

という詩句に、賭け事の遊びに夢中の宮女が具体的に活写されたように思われる。

舟遊びも両者とも関心事としていた。

「またの夜、月いともおもしろく、ころさへをかしきに、若きは舟にのりてあそぶ。：やうだい、髪のほど、くもりなく見ゆ」（十九）

という、宮中普段の舟遊びをする女房たちの麗しい姿に、「あたらしく造られたる船ども、さし寄せさせて御覧す。龍頭鶴首の生けるかたち思ひやられて、あざやかにうるはし」（二六）

という、天皇の行幸に催された船遊びの華やかさに、また「心をつくしてつくるひけそうじ、劣らじとしたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て」（二二）

という、何時もより美しさを競う女房たちの装いに

「山のさきの道をまふほど、遠くなりゆくままに、笛の音も、鼓のおとも、松風も、木深く吹きあはせていとおもしろし」（二七）

という、船が池の遠くにある島を廻ってゆく風情に、目線を凝らしている紫式部に同じく、花蕊夫人も韻文の制限された文字数内に宮中の船遊びを詠み込んでいた。

「池心小様釣魚船、入玩偏宜向晚天、掛得彩帆教便放、急風吹過水門前。」(74)

「画船花舫総新粧、進入池心近島傍、松木棧窓楠木板、暖風吹過一団香。」(91)

「時刻」船の華やかさ」「船上の女性の装い」「船の進路」といった着眼点も両者の相似が認められる。

無論、宮中に特有の音楽的雰囲気についても、中国の妃花蕊夫人と平安朝の女房紫式部はそれぞれ取上げている。

花蕊夫人は

「離宮別院遶宮城、金板輕敲合鳳笙。夜夜月明花樹底、傍池長有按歌声。」(11)

という詩句に、回廊によって繋がっている宮中、明るい月光の照る池の畔から花樹の下から毎晩音楽が聞こえてくる情景が窺え、或いは

「総是一人行幸処、徹宵聞奏管弦声：」(58)

「苑中排比宴秋月、管弦擗縦各自調：」(71)

などによって、帝の行幸の先々に必ず奏でられていた音楽が想像される。それに対し、紫式部は宮中の音楽を、官僚の宿直の時に、或いは天皇や中宮の御出ましの時に、内裏または中宮の私邸で耳にしていることを、日記の「六」段、「二七」段、「五四」段、「六〇」段などに特筆している。

そのほかに花蕊夫人の

「新翻酒令著詞章、侍宴初開憶却忙。宣勅近臣傳賜本、書家院裏遍抄將。」(86)

という詩に描かれたような、帝の新作を後宮の人々がみな廻して書

家に頼んで抄写させる光景が、紫式部日記の

「御前には、御冊子づくりいとなませたまふとて、明けたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙選りととのへて、物語の本どもそへつつ、ところどころにふみ書きくばる。かつは綴ぢあつめたしたむるを役にて、明かし暮らす。」(三三)

と記された日々を髣髴とさせる。

こうして見ると、後宮世界の日常に対して、描写の繁簡の違いこそあれ、ポイントの捉えかたは、花蕊夫人と紫式部との間には驚くほどの相似があり、そこに両者に共通する文学的感覚が認められるのみならず、日中両国の古代後宮における文化的生活の共通性も窺える。勿論、それぞれの細部描写によって違いも見られるが、例えば同じ宮中の水という話題でも、紫式部日記には庭を流れる「遣り水」に対して、花蕊夫人の水は、

「水車踏水上宮城、寢殿簷頭滴滴鳴、助得聖人高枕興、夜涼長作遠灘声。」(35)

というように、水車によって宮殿の高いところまで引かれた水なのであった。また女性の服装の色やスタイルから、日々の遊びまで異なるところも多い。中国の後蜀国の後宮では女性たちが、双六や囲碁のほかに闘鶏、騎馬、釣り、弾弓(はじき弓)、馬球(馬に乗っているながらやる球技)などの室外活動も盛んにやっていたことは、花蕊夫人の詩によって知ることが出来る。が、ここでは日中それぞれ女性の生活史や美意識の展開様相を示唆するこれらの課題はさておき、特に指摘したいのは、花蕊夫人作との相似点に、紫式部日記の自主性と後宮文学の特徴が見られることである。つまり内容の真实性が作者の実際の体験によって保証されると同時に、事件の選択

と表現の技法は作者の文学的技量だけでなく、その立場にまで深くかかわっているものである。それは、帝寵を争う世界の複雑な人間模様の深層に対して、花蕊夫人も深入りせずに事象の詠出に筆をとどめたということからもはっきり看取できる。

「太虚高閣臨波殿、背倚城牆面枕池。諸院各分娘子住、羊車到処不教知。」(14)

「老大初教学道人、鹿皮冠子淡黄裙。後宮歌舞全抛擲、每日焚香事老君。」(77)

「後宮阿監裹羅中、出入經過苑囿頻。承奉聖顏憂誤失、就中常怕内夫人。」(88)

「内人承寵賜新房、紅紙泥窓透画廊。植得海柑纔結子、乞求自進與君王。」(97)

と、短い韻文に凝縮していながら、そこに点描し出されたのは、帝の行く先が気取られないように造られた妃たちの住まい(第14)、突然、道教の服を着せられ、出家させられた後宮の女性(第77)、或いは後宮女性の管理者としてどこへも自由に入入りできる「阿監」が、しかし帝の機嫌を損なわないように日々過ちを心配しているだけでなく、内裏の夫人のことも常に恐れているという人間関係(第88)、寵愛を受けて新しい部屋まで賜った女性が、植えて生ったばかりの果物を自らの手で帝にさしあげようと乞う姿(第97)などである。花蕊夫人のさりげなく見える筆使いにも一抹の冷徹な光が光っているのである。この冷徹な視線は、前述の紫式部日記に相通ずることが明白である。

花蕊夫人の百首の詩作のどれを取って見ても、後宮生活の隅々まで楽しい目で追いかけては屈託のない詠作にしたものばかりで、文

学史でいつも言われる女性作の「宮怨」という翳りが殆ど見られない。それは寵愛された妃だからこそ「憂い無き」心から湧き出た詩情というならば、こうした明るい「宮詞」に似ている多くの内容が紫式部日記に見出されることは、また紫式部の宮仕え生活が充実していた一面を物語るものになるであろう。

とはいうものの、中宮のための安産祈禱の物々しい場面、五節の舞姫の緊張振り、男性官僚の泥酔醜態、そして女房同士の意地悪、ひいては正月前夜の引きはぎなど、後宮世界の闇の一面も漏れなく見入っている紫式部にとって、その陰影から如何に自分を守るかを当然考えざるを得なくなる。その自分とは必ずしも物的なものとは限らない。次にはそれについて考えたい。

### 三

紫式部日記に見られる人生への悲観的態度と同性への痛烈な批判の問題について、筆者はかつて考察をしたことがあるので参照されたいが、ここでは紫式部の宮仕えに焦点を搾って、比較研究という視点から考えてみたいと思う。

人間の真実を凝視していながら後宮という特殊の空間の真ん中にいる紫式部は、何を守ろうとして悩んでいたのだろうか？それを考える時、先ず「宮仕え」は彼女にとってどんな「利益」が見込まれたかという根本から問題を起こさなければならぬであろう。

紫式部の出仕は単に、娘や弟の出世のために、家運を起すために敢行したのであるか？女の身でしかも若くないという現実を無視してまで、己には出来るというほどの自信家だったであろうか？日記に徴してみるかぎり、理性的で引っ込み思案且つマイナス思考

型の式部のしそうなことではないと言わざるを得ない。

次には紫式部が後宮における役目について検討する必要があるであろう。つまり後宮では紫式部はどんな仕事を課せられたのか。その日記を手がかりに調べると、紫式部はふつうの女房と違って、主に彰子中宮の教養にかかわることが仕事であったことが明らかである。もともと、これは周知のことのようにであるが、しかし筆者には、そこに問題の鍵が隠されているように思われる。というのは、彰子中宮の教育係ということは、中国の正史に高名を残した班昭と同じく所謂「中宮の師」たる存在なのである。

班昭という女性には、班固の妹で、「团扇歌」によつて早くも日本に知られた班婕妤を祖姑に持つ女性で、家学淵源による博学が故、後宮の師として朝廷に召され、宮廷では上下を問わず、みな「曹大家」と敬称して尊敬された女性である。彼女は『後漢書』の編集と『女誡』という家訓などの創作によつて「金印紫綬」を頂き、女官として後宮に活躍していた。

『後漢書』七十四卷に、

「兄固著漢書，其八表及天文志未及竟而卒，和帝詔昭就東觀藏書閣踵而成之」

と記載された班昭のことは、高い漢文化教養を有する紫式部は自然知っていると想定できよう。実は中国唐代までの正史に「後宮の師」であつて尊敬された女性がほかにも多く記載されている。<sup>15)</sup>

目的はともかくとして、才学をもつ女性が尊敬されるという意識が平安朝にも見られたのが事実であるならば、最初に道長に招かれた時、尊敬される役目だと、紫式部が考えたであろうことは想像に難くない。そして一般の女房と違うという自覚を持つて、紫式部は

宮仕えを決意したのではないかと思われる。それが苦痛になったと日記に訴えた内容を検証すると、その原因は(二六)(二八)(二九)(三四)(三五)(四一)などの段落、及び消息文的部分にはっきり見出すことが出来る。例えば、

「高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかし」(二六)

というくだりに、我が尊厳無き宮仕え生活を省みて、それが所詮、御輿を担ぐ下人と変わらぬ、権門に雇われた一女房に過ぎないという意識がはっきりと読み取れる。また日々の生活についても

「いとくだりて上達部のゐたまはむも、かかる所といひながら、かたはらいたし」(二九)

と、常に公卿や権門子弟の前に晒されても、慣れていた他の女房と同様にしか思われないことに度々プライドを傷つけられたと嘆いている。さらには、才能を持つことは尊敬されるどころか、周りの女房に妬まれる原因となつて、自分は一字も知らないように、過度の自己抑圧をせざるを得ない窮地に追い込まれたと怒り、そして(二四)と(三四)と(三五)段および消息文に集中して、出仕してから時間が経つにつれ、かえつて心の悩みが深まつたと愁訴したのは宮仕え生活への失望の表れに他ならない。

そうして最後に、源氏物語を創作するぐらゐの才能もそれに見合った社会的敬意が認められなかつた今となつては、

「ころみに、物語をとりて見れど、見しやうにもおほえず、あさましく」(三四)

と感じてしまったのは、むしろ紫式部にとつて当然のことで、自己と他を区別する己の才能が無視されることは、そのまま自分の人格



と存在価値が否定されたと同然のこととなつてしまひ、彼女の心はそれから「すさまじい」「孤絶」に陥つていつたのも火を見るように明白である。いつてみれば、こういうことは現代の私たちの心にも起こりかねないことである。つまるところ、紫式部の出仕は先ず現代心理学の「自己実現理論」にいう「承認の欲求」に要因が見出されるかと考えられる。自分の生きようとする社会集団に受け入れてもらひ、また価値ある存在と認められ、尊敬されることを求める気持ちは、古今東西を問わず、人間共通の欲求なのであり、それが拒否或いは蔑視されたとき、人は心に大きな傷を負うことになるということである。しかし、紫式部は、現実の不条理な一面を終始冷静に見据えて、

「心すこもてなす身ぞとだに思ひはべらじ」(四九段)

と、どんなに辛く悩んでも自分を失わないでいようと宣言し、現実には失望した後も、明晰な理性によつて自分の才能に自信を持ち続け、絶えず自分を戒めながら「健全な理性」を持つて屹然としていたと見える。またそれによる自己の尊厳を守ろうとした。それは日記創作自体が証明になるだけでなく、日記の(三三)(一八)(二二)(三十)(三二)(三三)(三六)などの段に、さり気なく自分の存在価値を主張しようとしている紫式部が見出される。そうして穏やかな晩年を送ることが出来たようである。

その「原因不明の憂き世意識」は、感性的ながら、生命存在の意義を追究する多くの人に感じられたような「哲学的悩み」だと考えられるのではないであらうか。

紫式部に比べて中国の後蜀国の花蕊夫人は、まさに天国からいきなり地獄に転落したような人生の終わり方をしたといえる。花蕊夫

人は965年に後蜀国が宋の太祖に滅ぼされ、夫君とともに囚われの身となつた。彼女の名を青史にとどめさせたのは百首の宮詞より、宋の太祖を前にして詠んだと言われた一首の詩なのである。

「君王城上豎降旗、妾在深宮哪得知！十四万人齐解甲、更無一個是男兒！」

と、三万の宋兵に対して、十四万の後蜀の軍隊が一戦もせずに国をいとも簡単に明け渡した君臣の男ら全員を罵倒したのである。そして、宋の都に連行された途中に詠んだ詩は彼女の残した詩作に数少ない「悲愁」に溢れる詩の一首となつて今日まで残つた。

「初離蜀道心將碎、離恨綿綿、春日如年、馬上時々聞杜鵑」

贅沢三昧の後蜀朝廷が滅んで、望郷の思いの化身である不如帰(また杜鵑と呼ぶ)のように血の涙を流しながら、永遠に消えない無念を抱えている花蕊夫人にとつて、かつて惜しんだ爛漫たる春の日日もこれからの人生は、我慢せねばならぬ長い苦痛の歲月となろうと予想していた。しかしそれも叶えず、花蕊夫人は宋の後宮に納められて間もなく謎の死に方を余儀なくされた。

注(1) 日向一雅「紫式部日記論——「憂き世」意識から流離意識へ——」

平安文学論究会編『講座 平安文学論究 第六輯』(風間書房 1989・10)三五頁

(2) 原田敦子「後宮生活秘録と自己省察と——紫式部日記における消息文の意義——」一二頁

(3) 注(1)所引の日向一雅氏の論文を参照。第一節

(4) 注(2)所引の原田敦子氏の論文を参照。二〇頁

(5) 岡一男「源氏物語の基礎的研究」

- (6) 『国文学 57年10月』「紫式部集全歌評釈」一一六頁による。
- (7) 上掲の注(6)。同じ頁
- (8) 本論の引用は本文、章段番号とも、小学館版日本古典文学全集「紫式部日記」中野幸一校注による。
- (9) 下玉利百合子「『紫式部日記』の耀と翳 —— 一条天皇の肖像を中心に」(平安文学論究会編『講座 平安文学論究 第六輯』(風間書房 1989・10)所載)参照。
- (10) 上掲(9)の下玉利百合子氏の同論文、二、三頁
- (11) 曾沢太吉・森重敏『紫式部日記新釈』武蔵野書院 1964
- (12) 増田清秀「後蜀の花蕊夫人の「宮詞」」『日本中国学会報(31) 1979』一五一頁
- (13) 増田清秀「唐五代人作宮詞資料編」(学大国文 24号 1981)
- (14) 拙論「紫式部の自我について」(『瞿麦 第四号』日本女子大学文学部日本文学科後藤研究室気付 平成八年)参照
- (15) 拙論「日中古代女子教育への一考 —— 貴族階層を中心に——」(『東アジア比較文化研究 8』東アジア比較文化国際会議日本支部編 2009年)参照
- (16) 『歴代婦女詩詞鑑賞辞典』沈立東・葛汝桐主編 中国婦女出版社 1992 531、533頁

## 受贈雑誌(三)

近畿大学日本語日本文学	近畿大学文学部国文学科日本文学専攻
金城日本語日本文化	金城学院大学日本語日本文化学会
近代	神戸大学「近代」発行会
近代文学研究	日本文学協会近代部会
近代文学注釈と批評	注釈と批評の会
熊本県立大学国文研究	熊本県立大学日本語日本文学会
群馬県立女子大学紀要国文学国語学篇	群馬県立女子大学国文学研究室
群馬県立女子大学国文学研究	群馬県立女子大学国語国文学会
芸文研究	慶應義塾大学芸文学会
言語表現研究	兵庫教育大学言語表現学会
言語文化学研究	大阪府立大学人間社会学部言語文化学科
神女大国文	神戸女子大学国文学会
稿本近代文学	筑波大学国語国文学会
語学文学	北海道教育大学語学文学会
国学院雑誌	国学院大学
国学院大学大学院文学研究科論集	国学院大学大学院文学研究科学会